

感謝の気持ちたちが 人を動かす

PHP研究所

〰

株式会社タートルジャパン ◆ 三上敏彦社長
株式会社タン ◆ 越智直正社長
株式会社エバ ◆ 江場康雄社長
株式会社住本科学研究所 ◆ 住本守央社長
株式会社大安ホーム ◆ 光田敏昭社長

PHP研究所

水は借りもの、
使ったらきれいにして返す



すみもりお
住本守央 (株式会社住本科学研究所社長)

1934 (昭和9)年、横浜市生まれ。
父親の経営した潤滑油再生業を1973年に引き継ぐ。以降、
「再生装置」ではなく「清浄装置」を開発。その「借水思考」
は、特にアメリカで受け入れられる。

わが社は、主に、エンジンオイルなどの機械の潤滑油を対象にして、「オイルをエンドレスで使う」ことを研究・開発している会社です。

「オイル（＝機械潤滑油）は、機械を使用しているうちにだんだんと劣化していく」「廃油が出るのは仕方がない」というのがこれまでの常識でしたが、わが社では、これを半永久的に使用可能にするシステムを開発したのです。

しかし、ここまでの道は決して平坦なものではありませんでした。

「ユーザーの立場に立つ会社」

わが社は、もともとは船舶から出る廃油をリサイクル（再生）するという事業からスタートしました。昭和三十年（一九五五年）、私の父が、兄弟と一緒に始めた会社です。

父は京都大学（旧京都帝国大学）を卒業し、海軍燃料ねんりょうしよく廠で石炭および石油の研究を行なった後、その技術を持って石油精製会社に入社し、油事業に携わりまし

た。

父はそこで、〈油を売る側〉と〈油を使う側〉の考え方に大きな開きがあることに気がついたといえます。油を売る側は、油が消費されることを前提としていますし、使う側は少しでも長く、少しでもいい状況の油を使いたいし、それにもまして、潤滑油利用の本来の目的である機械本体を長持ちさせたいというのが願いです。

父は、その狭間はざまに立って考え尽くした結果、自分は徹底して〈油を使う側〉の立場に回ろうと決心したのです。そこで、ユーザー側に立って潤滑油の再生を行なう会社を設立しました。

最初、船から出た廃油を陸上の工場（現在の本社所在地）に持ってきて、そこできれいにリサイクルしてまた船に戻す、ということをやっていましたが、そのうち、いちいち油を運んでいたのでは時間がかかってしまい、需要に追いつかなくなってしまうので、油のリサイクル装置を船に積み込んで、再生をその場でやっ

てしまおうということになったのです。

つまり、船内における油の自家再生システムを開発・製造したわけです。

当時、一般的には、船舶の廃油を回収してリサイクルできる割合は約六〇%でしたが、私どもが開発した船内自家再生システムでは、九〇〜九五%の再生を可能にしました。この技術が高く買われて、日本郵船所有の船にはほとんど、この私どものシステムが搭載されるようになったのです。

これは一時期を画する発想でした。

会社創設から十年目、昭和四十年（一九六五年）頃のことです。

画期的システムもすぐに行き詰まった

私が父から会社を引き継いだのが、昭和四十八年（一九七三年）。

正に第二次オイルショックの年でしたが、「消費は美德」であり、「オイルは交換するもの」「古い油は捨てるもの」という一度味わった消費文化の魅力からは、なかなか離れられない風潮がありました。つまり、リサイクルなどという面倒な

ことはしないで、新しい油を入れればよい、という時代感覚だったのです。

しかし、それと同時に公害が大きな社会問題になり、廃油・廃液の海上投棄が、一切認められなくなりました。再生率九五%とはいえ、五%の廃油は発生します。当時は海上投棄があたりまえの時代でもあったのですが、たとえ一滴でも、廃油の投棄はできません。

そこで、海の上で廃油を作って捨て場に困るより、陸に上がるのを待ってオイル交換をするほうが楽だということに戻ってしまいました。こうした状況は、私たちには大変な逆風でした。

その逆風の中、会社として身動きの取れない苦しい時期に、私は、ある重大なことを発見することになるのです。

機械にも“腎臓”機能が必要だ

それは、大型船のように一年に一回、油を一気に全部リサイクルして再使用する

る船よりも、油を何分の一かずつ、一年間に何回もリサイクルしては戻して使わざるを得ない船のほうが、機械が長持ちする、ということでした。つまり、油を廃油に近い状態まで使い切るよりも、常にきれいな状態で使っているほうが、機械は傷まない、というあたりまえのことに改めて気がついたのです。

それならば、常時油をきれいにする装置を開発して取り付ければいいじゃないかと考えたわけです。これはいわば、機械に「腎臓」機能を設置することだと言えるかもしれません。

人間(動物も含めて)の腎臓機能は、血液をクリーンにする働きをしています。その血液は、身体の各部に栄養分を運ぶと同時に不要な老廃物を持ち帰る役目をしており、腎臓では、血液からその老廃物を取り除き尿として体外に排出する選別作用を行なっています。つまり、汚れた血液をきれいにしてまた身体に返すことが、腎臓の機能なのです。腎臓が正しく機能していれば、動物の身体は健康で、いつまでも長持ち(長生き)します。

私は機械も動物と同じではないかと気づいたわけです。

機械にとって油は、動物で言えば血液。常にクリーンな状態に保ってやれば、機械は健康だということです。ですから逆に考えれば、油を汚れたままにしておけば機械は病気になるし、ましてや廃油になるまで使つては、機械の寿命が縮むのは明らかです。

油が廃油になる原因の九割以上が不純物の混入による汚れです。そして、その不純物が化学変化したりすることによって油の劣化が生じるのです。

機械の潤滑油に不純物が入っているということは、当然、機械が摩擦したり磨耗したりして動作不良や故障などを招きますし、破損や消耗を引き起こす原因ともなり、機械の寿命を縮めているわけです。

機械に腎臓機能を加えて常に油をクリーンな状態に保つてやれば、機械は傷まず、また長持ちするはずです。常に不純物を取り除くシステム(「腎臓機能」があれば、機械は健康でスムーズに働き、寿命も長くなり、効率もあがり、面倒なオイル交換もなくて済みます。また、常に不純物のないクリーンな状態の油は、劣化もしないはずです。

要は、油を廃油にしてはいけないのです。廃油にならないよう、不純物を除去して常にクリーンな状態にしてやれば、油はいつまでも使え、そして、機械もまた、いつまでも使えるのです。

開発テーマにじっくり取り組む

この発見について、父とは相当議論をしました。廃油そのものをなくそうという私の考え方に、当初父は消極的でした。

それは一面もつともなことでした。私たちの仕事はそれまで、廃油をリサイクルすることで成り立っていたのですから、廃油がなくなれば、会社の存在基盤もなくなるわけです。

しかし、最後は納得してくれました。「自然を汚さないシステムを開発したい」という私の願い出が決め手となったようです。

この、機械に腎臓機能を持たせるといふ考えによって、油の再生についても、

それまでの「化学的に油を再生」するから、「物理的に清浄」というように、方法が大きく変わりました。

またそれまでは、油が足りないから「廃油も使うために再生しよう」という意識だったものが、機械を安全に長く使うために、油を「廃油にしないために常に清浄しよう」という意識に変化しました。

企業に対しての私たちの提案は、単に潤滑油の節約を訴えるのではなく、会社の資産である機械を大切にしようということを行っています。機械が傷まず、より長く使えることで、生産性は相当向上するでしょうし、オイル交換のランニングコストも抑えられます。

ユーザーのメリットを第一に考えたシステム

開発・研究には二種類あると、私は考えています。

すなわち、「自分の会社のためになる研究」と「ユーザーのためになる研究」です。

私たちは、徹底的にユーザーの立場でものごとを考えようとする研究スタンスでやってきました。お客さまがこの新しい理論を受け入れてくださったのも、私たちがそのスタンスを崩さなかったからだと思います。

「どうしたら油を長く使えるか」「機械が磨耗しないためには——機械が長持ちするには」といったテーマは、ユーザーのメリットを第一義に考えた研究です。

「油は廃油になる。それは仕方のないこと」は、油を売る側の論理です。すでに明らかのように、油が廃油にならないければさまざまな問題が解決されます。

日本の潤滑油の販売量は、年間約二五〇万トン。その半分の一二五万トンが廃油として一年間に処分されています。大半が再生燃料としてリサイクルされているとの報告がありますが、廃油をリサイクルすることは単なる一時的な解決方法にしかなしません。後には産業廃棄物処理の問題が残ります。また燃料として燃やした場合でも、ばいじん煤煙などの環境問題が発生します。

廃油処理の現状は、実はどうなっているのか分からない、というのが本当のところ。離島や山の中にドラム缶が大量に放置されているとのニュースは、誰

でも一度ならずは耳にしたことがあるでしょう。私は、こういうニュースに接すると、一体誰が何のために、なぜこんなことをするのか、また、誰が得をするのだろうか、さびしい気持ちになります。

この間も、福島のほうで五万五千本の廃油ドラム缶が見つかったというニュースがありました。これを二十数億円という我々の税金を投入して後片付けをしたというのです。ことは一刻を争う問題です。

■ 廃油を出さない生活をする

廃油の処理が不十分なのは、新油の購入費より、最近では廃油を持ち出す値段のほうが高くなっているからです。

天ぷら油の例で見ますと、新油を購入する代金が二十リットルあたり五〜六千円。それに比べて、廃油を持っていってもらうのには最高一万円かかる例もあります。この一万円で引き取った業者が次の業者に五千円で請け負わせ、さらにこ

の業者が二千五百円で次の業者へ回します。といった具合で、最後に実際に処理する業者は、とても割りの合わない金額で請け負うことになってしまふのです。場合によっては、法律に基づいた処理などできなくなる、というのが現実なのです。私たちのシステムを使えば、天ぷら油も繰り返し何度も使えるようになり、わずかに二〜三回しか揚げないで、凝固剤を使って固めて捨てるなどという事はなくなります。私どものシステムでは、油は常にクリーンに、フレッシュな状態に保たれますので、何回揚げても新しい油を使った揚げたての風味を楽しんでいただけます。

考えてもみてください。油を何回か使って廃油にして交換する、ということは、油を交換する直前の天ぷらは、廃油で揚げたということになります。こんな使い方では間違っている、と私は思うのです。

常に新しい油と同じ状態で揚げられるようになっていなくては、天ぷら油としての意味がありません。味覚もそうですし、健康面から考えてもそうです。私たちのシステムは、そのためのシステムなのです。基本の考え方の根底にあるのは、

「味」です。油が何回も使える、というのはおまけです。「味のため」「健康のため」というのが、本当にユーザーのメリットだと思ふのです。

■ プールにも腎臓機能を

この腎臓機能をお手本にしたエンドレスリサイクル理論は、すべてのことに使えると考えています。

その代表が、「水」です。

例えばプールの水は、年に二回か三回、全部を取り換えるように義務づけられています。そうすると、換える日の前日の水は、いわば排水です。また交換前の水には、おそらく消毒剤もたつぷりと使われていることでしょう。このような排水寸前の中で、次代を担う子供たちを泳がせているわけです。はたして、こんなことが許されているのでしょうか。水を取り換えなくてもいいシステムを作るべきなのです。

そのためにはプールに腎臓機能を持たせて、常に水をきれいに清浄するようにして、飲んでも平気なくらいの水の中で子供たちを泳がせるべきなのです。泳ぎ終わった後で目を洗わなければならないなど、考えなくてもいいことなのです。消毒剤なども不要。健康になりたい人たちが集まって来る場所なのに、インストラクターの髪の色が赤くなってしまいうような水を使っているなんて、どこかおかしいと思いませんか。

確かにコストはかかるかもしれませんが。しかし、水を取り換えなくてもいいシステムは、できないわけではありません。問題は、できるのにやらないことなのです。こういったことは、今起きているあらゆる公害問題すべてに通じています。

■ 水は誰のものなのか

よく「水は天からの授かりもの」などと言われますが、私は、この考え方は間違っていると思います。授かったものだから、もらったものだから、ということ

で、後はもらった者の自由にすればよい、ととらえがちです。だから、いらなくなったから捨てる、汚れたから捨てる、ということが平気なのです。

排水基準なるものがあります。COD(化学的酸素要求量)、BOD(生物化学的酸素要求量)などの水質汚染の程度を示す数値が、環境庁から提示されています。この数値に満たない水は、勝手に捨ててはいけない、というものです。裏を返せば、この数値をクリアすれば、汚水でも捨ててもよい、ということになります。

これでは困るのです。捨てる思想が最初にあります。田子の浦のヘドロの原因は、富士山から生まれる豊かな水を、地元の人たちが自分たちのものだとして勝手に決めつけて、紙を漉き、その排水を海へ捨てたからです。それが海底でどろどろになってヘドロになったのです。

水は自分勝手に捨ててはいけません。

私は、〈授かりもの〉ではなくて〈借りもの〉と考えています。天から借りたものは返さなくてはなりません。〈借りたものを返す〉ということは、利息をつけて返すということです。お金でいえば、百円を借りたら百五円にして返す、というの

があたりまえの姿です。つまり、水は汚したままではなく、元通り以上のきれいな水にして返す、ということ。元通り以上にきれいになれば、自分も再び使えばよいわけです。

現状はどうでしょうか。今の水の行政では、百円を借りても、八十円も返せば十分です。元通りにしないで返しても済んでしまうのです。

私はこれではダメだと考えます。借りものですから元通り以上にして返す。このことを、地球上のすべての人々が心がけていけば、この世の中から水に関連する公害はなくなります。私は、この考え方を『借水思考』と名づけました。

汚したものは元通り以上にして返す

水は借りているのですから、貸している人がいるはず。私たちは、誰から水を借りているのでしょうか。

神様や仏様でないことは確かです。なぜならこの人(?)たちは、たとえ返して

もらえなくても、また利息がなくても(汚れたままでも)、損はしないでしょう。やはり貸した人は、返してもらわなかったら損をする人です。

「未来の人間(我々の子孫)も含めた生物」。人間だけでなく、メダカやゲンゴロウなどの小動物を含めて、未来に生きるはずの生物たちから、我々は水を借りていると考えたら……。

水は、そんな彼らが使えようなものにして返すべきなのです。

また私たちは、水だけではなく環境そのものについても、自分たちが生きた状況以上のものにして返す努力をしなくてはなりません。

自分たちが覚えている、魚や虫たちが住んでいた美しい川や湖にして未来の世代に引き継ぐべきなのです。我々が汚した分は、それ以上の利息をつけて返すべきだというのが、私の考え方——『借水思考』なのです。

単に「美しい自然を残そう」とか「緑を取り戻そう」などと言っただけではなく、もちろん多くの皆さんが地道にいろいろな活動をやっつけたりすること、は承知しています。その上に「使ったものはそれ以上にしてお返しする」という

考え方を皆さんに理解していただけたら、どぶ川もせせらぎになったりするでしょうし、もっと身近なところから変えていけるのではないかなと考えているわけです。

最近私は、いろんな機会を通じてこの『借水思考』を盛んに語るようにしています。

油の廃油をなくす考えにしても、水の排水に関する考え方にしても、みんな自然に教わったものです。油のエンドレスリサイクルシステムを完成させたのは、動物が持っている腎臓機能の素晴らしさです。自然のいとなみに感謝しないわけにはいきません。

借水思考は、自然へのお礼と感謝の表明です。

このままの状態の後百年もすれば、石油はすべて使い切ってしまうだろうと言われている時代に、まだ油をドンドン産み出して売ろうとしています。売る側の論理ではなく、使う側の論理に立つ人たちのための研究がいかに必要か、今こそあらためてその大切さを感じています。

「廃油をなくそう」「油はエンドレスで使える」「水は取り換えるな」など、こういうことを言い続ける人間がいないと、地球も地球上に住む生物の身も心もどんどん汚れてしまいます。

汚れるスピード以上のスピードで清浄

大量生産、大量消費という経済構造が、必ずしも人間社会を豊かにしてきたとは言えません。だからこそ、今日、修正がはかられているのです。企業も、自分たちが世の中に出した製品の最後をどうするのかが問われています。作りっ放し、売りっ放しは通用しなくなっています。売る側、作る側の論理ではなく、ユーザ側からの視点が、今こそ必要なときなのです。

私たちの研究の原点は、自然のいとなみである動物の腎臓の働きでした。私たちの研究の成果が、最終的に環境問題に貢献できるのも、こうして考えてみると原点回帰なのかもしれません。自然の摂理に学んだことが、結局、自然保護に役

立つ。自然とは実に大きなサイクルで、我々を見ているのだなと感じます。

腎臓というものをあらためて見直しますと、動物の身体には二つあって、一つでも十分に血液の清浄作用が行なわれるようになっていきます。二つあるということとは、つまり、通常の状態でも二倍の清浄能力を持っている、ということなのです。血液が汚れる量よりもきれいにする量のほうが勝っている、血液が汚れる以上の清浄能力が動物の身体にはあるというわけです。ですから、血液がいくら汚れても、それ以上にきれいにして身体に返しているのです。もちろん、一つがだめになっても、もう一つがきちんと同じ働きをするためという意味もあります。

同じように機械についても、機械が汚す以上のスピードで油をきれいにする能力がなければ、清浄作用は意味がありません。汚れるスピードのほうが勝っていれば、徐々に油は汚れて、結局は廃油になってしまいます。

また機械は、何年たつても常に変わらないクリーンな状態の油で運転されれば最高の力を発揮します。一年目、二年目……五年目と、油の状態が同一でなければ、結果的には機械の磨耗、消耗の要因となります。

つまり、機械が汚す以上の能力を持った清浄システムと、クリーンにした油の状態を維持することができなければ、とても油のエンドレス使用などは言えないのです。

私たちの開発したシステムにおいては、入ってきた不純物より除去する不純物のほうが多いくらいです。極端に言えば、一度清浄すれば新油よりきれいになるくらいだとも言えます。そしてその状態が維持されるのです。

私たちは、油のエンドレス使用に関する技術を確立しました。どんな油を持って来られても大丈夫だと、自信を持っています。

■ 企業は発想を変えるべき

機械を長持ちさせる、機械の故障を防ぐ、という私たちの考え方は、予防工学の見地に立っています。一方には機械を分解、オーバーホールして点検し、また組み立てるといふ解剖工学の立場もあります。私たちはユーザーの立場に立つ

て、機械の消耗を操作環境から抑えるという視点で研究を進めてきました。

その結果が、潤滑油のエンドレス使用から廃油をなくすという考えに至ったわけです。

はじめは廃油処理のことで私たちの話を聞きに来ていた企業の方なども、聞き進むうちに、「これは機械の話だ」と分かってこられたようで、最近では理解いただく方が増えてきました。

自社の製品に、「よし、腎臓を入れよう」と、私どものシステムを採用してくださるメーカーも増えてきました。ここに来て、少しフォロワーの風が吹き出したかな、と感じています。

私たちの研究所は、特定の企業からの援助はいつさい受けていません。現在もそうですが、将来もないでしょう。

ですから、徹底的にユーザーの立場で研究、開発、提案ができるのです。援助を申し出てくださる企業は数多くあります。ありがたいお話ですが、私はすべてお断りしています。

会社の経営は、実際のところ楽ではありません。しかし、それでも企業の援助を受けないのは、やはり私たちの原点であるユーザーのための研究を貫き通したいからなのです。援助を受ければ、どうしてもその会社のための研究に手を染めざるを得ません。それは、私たちが望んでいることではないのです。

もちろん、研究の成果はオープンにしています。どんな業種の企業でも、おおいに利用していただきたいと考えています。

自分の車を長持ちさせる

私の車の話をしましょう。私は二〇〇〇ccのオートマチック車に乗っています。十年前の車種です。一三万キロ乗りました。現在でも一リットル当たり一二〜一三キロ走ってくれます。もちろんオイル交換はしたことはありません。同クラスの車だったらどうでしょうか。燃費はせいぜい、一リットル当たり七〜八キロというところではないでしょうか。

常にエンジンオイルをクリーンな状態に保っているから、まだこれだけ走ってくれるのです。おそらくこれから先も、この状態は変わらないでしょう。当然、炭酸ガスの排出についても、他車より三〇％は少ないはずです。

「車が年をとってきたから燃費が悪くなる」というのは間違いです。性能がおちるのは、油を廃油になるまで使うからです。「早め、早めの交換」も、常にオイルをクリーンに保つ清浄システム（腎臓機能）があれば、半永久的に交換の必要はありません。

つまり、エンジンに腎臓機能を持たせるだけで、車はいい状態で長く乗れるということなのです。自動車会社にとってみれば、買い換え需要がなくなるということ、あまりよい話ではないかもしれませんが。

しかし、時代はどんどん進んでいます。ユーザーの意識も進んでいます。買い換え需要などと後ろ向きの発想をしていないで、何年たっても性能のおちない、本当に乗り手をあきさせないような、思わずうなるような車を作ってみたらどうでしょうか。ユーザーの要求は一リットル当たり二〇キロ走行を二十年間継続する

るような車なのです。

発想の転換が求められる時代が、必ず、近いうちにやって来ます。そのときになってからでは、もう遅いかもかもしれません。

■世界の環境意識は進んでいる

私たちは今、帝京大学教授の東忠則先生あすまたのりのお力などを借りて、学会などさまざまな機会をとらえて、廃油をゼロにする〈腎臓機能〉理論と〈借水思考〉に関する論文を発表しています。

論文を数多く発表することで、まず、学者や業界、環境団体に、私たちの存在をやや知っていることを知ってもらおうと考えているのです。

そんな中、平成八年（一九九六年）の第七回国際廃棄物会議で、私たちの〈腎臓機能〉理論を発表する機会がありました。そのレポートの最後に〈借水思考〉について記したところ、アメリカの先進的な人たちがその論旨にたいへん共鳴してく

れたのです。今、ベンチャー企業としてデビューしようとしています。

その企業は、アリゾナにオイルリサイクルのプラント工場を建設していますが、オイルのリサイクルだけではなく、水に閉してもすべてリサイクルするのです。ですから、この工場にはオイル用の腎臓だけでなく、水用の腎臓もあるというわけです。また、屋根にはソーラーシステムを採り入れています。エネルギーはすべて自分たちで作り、資源は使ったらきれいにして戻す。こんな工場を早く、日本でも見てみたいと思います。こういった形で「借水思考」が、国際的に評価されるのはほんとうにうれしいことです。

同じアメリカ・アリゾナ州の話ですが、パトカー百台に、私どものエンジンオイルのフィルターを取り付けることが決まっています。それで廃油投棄の現場を取り押さえに行くのだそうです。アメリカでは、廃油の不法投棄はたいへん厳しく取り締まられています。私たちのフィルターを取り付けることで、取り締まる側の廃油処理は完璧というわけです。捕まえられた人たちも、そのうち私どもの製品を買ってくれるかもしれません。

アメリカでは「廃油が出ない」というだけで、その技術はたいへん評価されるようです。それだけ切実な問題になっているのでしょう。日本もすぐ、そういう時代に入ります。世界の環境意識はそれだけ進んでいるのです。

人育てるのが、私の使命

昭和四十五年（一九七〇年）、私は交通事故を起こして重傷を負いました。額部分割れ、手も足も骨折という、たいへんな目に遭ったのです。死んでもおかしくないくらいでした。三十六歳でした。

東京・新宿の病院に入院したのですが、そこでは毎日、全身薬漬けの日々でした。このままでは事故の傷がもとではなく、このわけのわからない薬の大軍によって殺されてしまう、と思ったものです。

当時はまだ、インフォームドコンセントなどという概念はなく、薬なら何でも病院の言われるがまま服用していたのです。最近、薬やカルテの取り違いで死亡

事故が起こっていますが、今思い返すと、私もよく間違えられなかったものだと思います。それほど、いろいろな薬が次から次へと与えられたように記憶しています。

そこで、最初の頃の昏睡状態のときでした。空中に浮いたようになって、猛烈に後悔の念を感じたことが、強烈な印象となって覚えています。臨死体験のようなものだったのではないのでしょうか。

それ以降、自分の過去を振り返り、これからのことを考えて、決して後悔しないような自分の生き方を必死になって考えました。

「自分の一生の仕事とは何だろう」

「これでよかった」と死ぬるには何をすればいいのだろうか」

退院してからも考え続けました。

ある程度動けるようになってからは、三カ月間、丹沢たんざわの山に入ってまで考えたのです。

今の私があるのは、その当時に何カ月もの間、必死に考えたという経験が大きい

く影響していると思います。

結論を言えば、人を育てることです。財産や金を残すことではない。人を育て、研究所、研究所の理念、文化を伝え遺すことだと思いついたのです。

それからは、その三年後に社長職を引き継いだわけですが、先代社長である父の徹底したユーザー路線をひた走り、人材の育成を心がけてきました。

私たちの研究所の技術はそれなりに注目されていましたが、父は京大理学博士の学位を有していたため、事業一筋とはいきませんでした。私は、学位などはありませんので何の制限もなく事業ができたわけですが、人を育てるほうが向いていると自覚していましたので、事業についてはあまり無理はしませんでした。

結果的に、それでよかったのだと思っています。

人を育てるといえるのは、私にとっては、私よりできる人間を一人育てることだと考えています。一人でいいのです。たくさんは要りません。

自分を超えられることを恐れてはいけません。いい例が大学の教授の研究室でしょう。先生は、決して自分よりできる助手は育てないと言われています。助手

が自分を超えてしまえば、クビになってしまうからです。だから継続しないのだそうです。

しかし、この自分以上の人間に育てるのは、なかなか難しいことです。最近では、極端に言えば、二分の一の能力の人材でいいから二人育てられればいい、なども考えるようになってきました。

私の使命は、人を育てること、その後継者にどんな研究所を遺すか、です。従業員が何の心配もなく、研究に没頭できる環境にして渡してやりたいと思っています。

やはり企業のためではなく、ユーザーのために研究する研究所、五人より五十人、五十人より五百人、五千人、五万人……のため、あらゆる人のためになる研究所でありたいと思っています。

これまで私たちがやってきたことは、決して間違っていないと信じています。油も水も、完全にエンドレスで使えるように研究してきたことは、絶対に残る技術だと確信しています。ですから、もっと広まってほしいと思うのです。広まっ

てくれることで、私たちの研究所も経済的に自立できます。私の役目はそういう意味で、もっと〈腎臓機能——廃油ゼロシステムの考え方〉と〈借水思考〉を広めることだと意識しています。

以前は、研究所はプレハブ作りでした。五年前、鉄筋のビルに建て替えたなら、それほど大きなビルでもないのですが、人が訪ねてくれるようになりました。人の行き来が出てくると情報も集まり、また発信ができるようにもなります。

器も大切な要素だと思いました。

将来、アリゾナの工場ではありませんが、あらゆるものをリサイクルする、人が驚くような研究所を作って、たくさんの人を呼び寄せたいと考えています。そして、その研究所を後世の人々に引き継がせたいというのが、今の私の目標です。

私の父は生物化学者でした。その父が、「自然に合ってるものは、より多くの人が幸せになるように進化している」と、教えてくれました。

人為的に作りだしたものは、誰かが得をして、誰かが損をするようにできてい

ます。しかし父の言うように、自然から学んで、自然に見合うように作ったシステムは、誰も損をせず、みんなの幸せになるようにできています。自然界に生きる動物の腎臓の働きは、まったく理屈にかなっており、多くの方に無理なく理解されるものです。

今の時代にこそ、この「腎臓機能IIエンドレスリサイクルシステム」は、あらゆる場面で必要な機能になってきているように思います。

そこから生まれた「借水思考」は、未来のために私たちが意識しなくてはならないことです。

私は、これらのすべてを自然から教えてもらいました。自然に感謝——。私どもは利息をつけて、学んだ成果を自然に返さなければなりません。

回 社 概 要

社 員 数	二十名
社 員	神戸連絡所 神戸市兵庫区本町一―五―一五
営業所・工場	つくば工場 岩井市大崎五二三
名 称	株式会社住本科学研究所
代 表 者	住本守央
設 立 者	昭和三十年十一月
業 種	エンジン潤滑油のリサイクル装置製造販売
本 社	神奈川県横浜市港南区港南台一―四―一三 TEL〇四五(八三二)三五〇三 FAX〇四五(八三二)三五〇八